南禪寺宝

始

和

南禪寺寶

11-441

高麗國
南禪禪寺

はしがき

當山は臨濟宗の本山にして京都五山之上なり。記錄を按ずるに弘安年中龜山上皇此の地の山水明媚なるを愛し離宮を經營し給ふ。偶々宮中に怪異の事ありければ東福寺の大明國師を召して鎭壓の法を問はしめらるゝに、國師對奏して申さく、妖は德に勝たず衲子此に在らば何の怪かあらんと、師たゞ宮中に趺坐するのみにして怪異忽ち息めり。されば叡感最も深くこれより師弟の禮を執つて國師に禪定を學び離宮を賜うて伽藍となし國師に勅して開山第一世となし給ふ是れ當山の濫膓なり、南院國師は開山の上足にして第二世たり。勅を奉じて大佛寶殿及び諸堂を創建す。以後宗門大いに盛んにして京都五山の首位となり、相國寺創建せられて五山に列するに及び當寺は特に五山之上に置かるゝに到る。應仁の大乱に炎上して以來頗る頽廢せしも豐臣氏德川氏の時、次第に復興し、再び舊時の盛觀を見るに到れり、境域は後ろに山を負ひ前に京都市を望み、春花秋葉頗る形勝の地にあり、表に勅使門あり、次に三門あり寛永五年藤堂高虎の建造せしものとす。大方丈は舊清涼殿を賜はりしものにして之に舊伏見城遺構の一部を移して小方丈と稱ふ。之等の三門大方丈及び小方丈は共に特別保護建造物たり。頭塔子院には大方丈の南に南禪院あり龜山上皇の御骨を分納せる塔あり、西は天授庵にして大明國師の塔あり、その西の金地院の方丈は伏見城の一部にして特別保護建造物に指定せらる。當山には宋元書の優秀なるもの多く國寶となれるもの、鑑查狀を附せられたるもの等枚擧に遑あらず、清涼殿には狩野元信、同永德、山樂等桃山時代畫聖の襖繪今尚燦として光り方丈水呑みの虎は探幽の筆にして最も世に名高し。先年本堂の再建成り、這般庫裡玄関等の大工事も亦完成せり、時恰も當山第二祖南院國師六百年の大遠諱に當り門末擧つて報恩の大法會を營むに及び、乃ち寺寶の一部を上梓して記念出版となすと云爾

（編者記）

大正
10 4.11
内交

龜山法皇尊像

狩野探幽謹書

龜山上皇福地の離宮に怪異あり、東福寺に住せる普門大明國師を召して之を問はせらる、普門安居坐禪するのみにて、怪頓に息み叡感斜ならず遂に和尚に歸依して離宮を賜ひ師弟の禮を執らせらる、此尊像は實に後年狩野探幽齋守信が開山普門大明國師及び二世南院國師の頂相と共に、三幅對として謹書せるものなり。

亀山法皇御起願文

開山大明國師に次いで二祖南院國師龜山法皇の勅を奉じて、大佛寶殿及び諸堂を建立し一大梵宮巍然として龍山に聳ゆるに到るや、皇室の尊榮と共に當山の洪基を固め玉ふ大御心にて上皇親ら御起願文を製し玉ひ、當山に納める本文即ち之れなり。

開山大明國師頂相

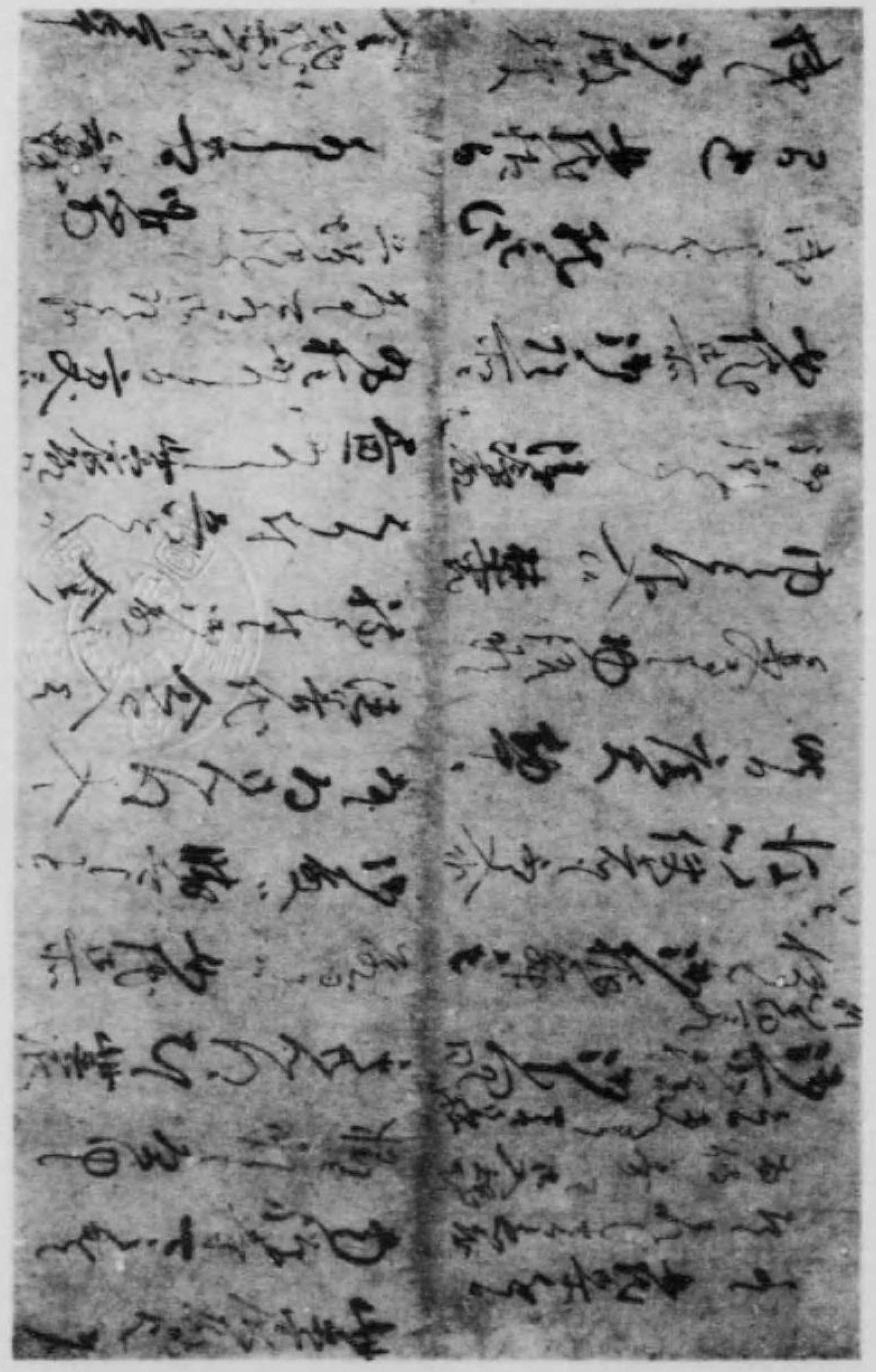
龜山法皇御賛
後柏原天皇御宸筆

普門字は無關、信州保科の人、十二歳にして祝髪す、或る日忽ち歎じて曰く、大丈夫當さに大方に翺翔すべし豈に一方に粘着すべけんや、と、遂に錫を飛して宋に入り兩浙に過遊すること十二年、歸朝の後藤原實經請うて東福に主たらしむ、居ること十餘歳、正應年中、龜山上皇より離宮を賜ひて禪刹となす、爾後上皇屢々幸して禪理を問ひ玉ふ、門、此冬病みて病革るや、上皇親臨して之を問ひ親ら墨を磨し毫を濡し遺偈を命せらる、門欽んで書し坦然遷化す、實に正應四年十二月十二日なり。上皇御賛の頂相は應仁の兵乱に燒失せしを以て文龜元年法孫某等、後柏原天皇に奏請して更に新像を圖し、上皇舊賛の宸筆を仰ぎたるもの是れなり、別に宅磨榮賀筆の國師頂相あり國寶に指定せられ居るも今は畧して掲げず。

南院國師頂相

絶海和尚賛
後陽成天皇宸筆

二世南院國師は當南禪寺創建に祖にして龜山法皇の歸依淺からず、本圖の筆者は之を詳らかにせずと雖も賛は絶海和尚の文にして、後年後陽成院親しく御宸筆をとらせ玉へるものなり。

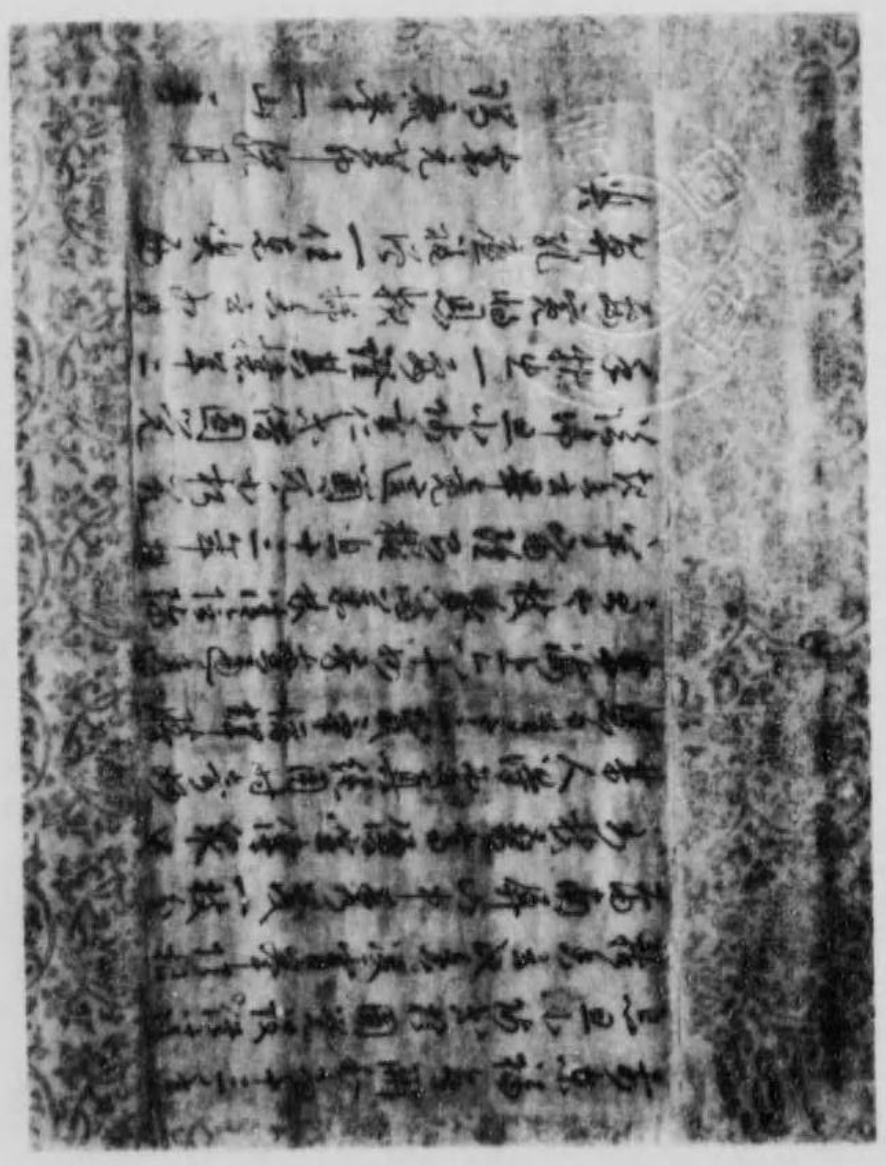


後陽成天皇宸畵

後陽成院は書畵共に優れさせ玉ひ殊に御信仰篤かりしを以て、京都諸山に珍寶として遺れる宸書數點あり、本圖は實に其一と傳ふ。

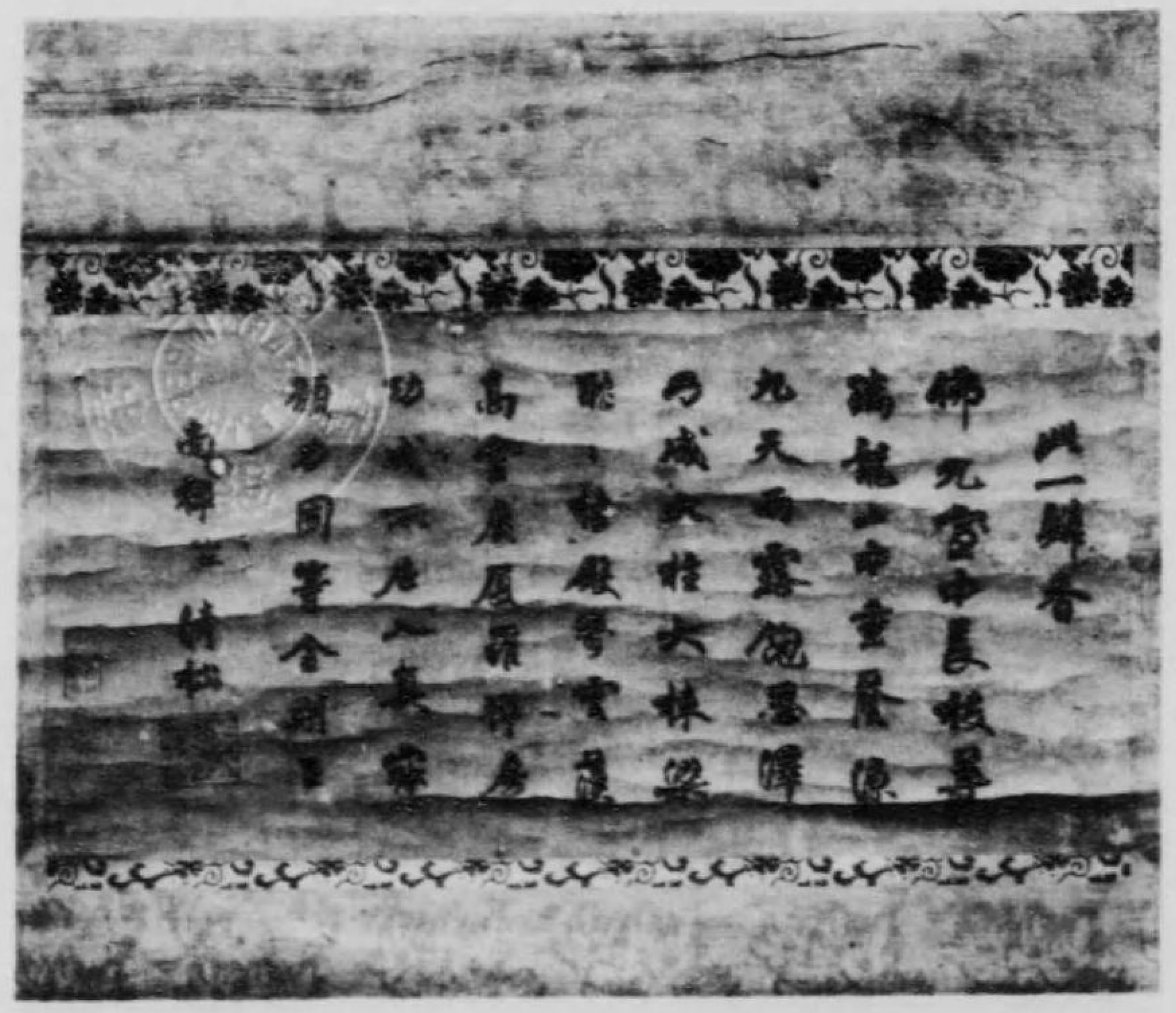
清涼殿拜領由緒書　（六幅對）

後陽成院より舊清凉殿を拜領せる（當山の大方丈として）當時の書翰にして六幅中一幅は、日野大納言の書翰にて即ち之れなり、他の五幅は時の南禪寺本光國師等の書翰にて、今は何れも國寳に指定され居れり。



寧一山墨蹟

寧一山は宋の臺州人なり、元の成宗の勅を奉じて日本に渡り北條貞時の疑ひを受けて幽せられしも、後宇多上皇の勅請を辱ふして、第三世を董す、本書は一山鎌倉にあるの日、開山大明國師の十三回忌辰に當り一山がものせし偈なり、冠首に前東福とあるは大明國師が一旦東福に歸住し、文保元年十月廿五日世壽七十一歳を一期とし勅刱前に遷化せるを以て、特に東福の法階によれるものなり。



清拙和尚墨蹟

清拙諱は正澄、元の人なり、福州に生れ、十五歳にして出家し愚極禪師の法を嗣ぐ、嘉暦元年來朝し北條高時の請を受けて建長及び圓覺に住し建仁を經て南禪に轉住し第十四世を董す、暦應二年正月十七日世壽六十六歳にて入寂し大鑑禪師と諡賜せらる、本書は二世南院國師忌に於ける師の拈香法語なり。

聖僧文珠

李龍珉筆

李公麟字は伯時、龍珉居士と號す、法書名畫を博覽して古人用筆の意を知り書畫共長ず、居士の佛像は呉道玄を追ひ山水は思訓に似、人物は韓幹に似たり、當に宋畫中の第一とす、畫を作くる概ね設色せず、ただ古畫臨摹の場合のみ絹素を用ひ著色すと、本圖は國寶なり。

十六善神

張思恭筆

張思恭と傳ふるもの當山にも數點あり、何れも尋常にあらず、然れども思恭の傳、今之を詳らかにせず。本圖は國寶に指定せらる、別に思恭筆小涅槃像あり是れ亦國寶なるも略して掲げず。

十六 羅漢

足利義持筆

勝定院殿足利義持將軍は、東福寺の殿司明兆の人格と其藝術を愛したるは史實に明らかなり、本圖は勝定院殿の筆と傳へられ鑑査狀を附せられたるものなり。

鳳凰の圖 （扇面）

本圖は金地扇面張交屏風四双二百四十枚の一にして、寺傳には宮中高貴の御愛藏あそばされしものを蒐めたるものなりと、而して二百四十葉は概ね桃山前後の狩野家の筆になり、元信、永德、山樂等の作最も多し、但し元信の作には落欵あるも他は殆んど無し。

草座の釋迦　（文殊普賢と共に三幅對）

明兆筆

明兆は本朝畵僧中の巨擘なり、名は吉山、淡路の人、剃髮して東福寺大道禪師に師事せるも資性畵を好み宋の李龍眠を學び行雲流水の間に自然を悟得し其技絶妙にして眞に迫る、廣永年中東福寺の殿司となり塔頭南明院に住す、因つて兆殿司と號す、又別號を破草鞋赤脚子と云ふ、永享三年八月二十日病沒す、本圖は明兆の筆にして嚢に鑑査狀を附せられたるものなり。

半身達磨圖

啓書記筆

祥啓は鎌倉建長寺の僧なり、玉隠永璵に師事す、人呼びて啓書記と云ふ、天資畫才に富み水墨は牧渓を學びたるも藝阿彌所藏の粉本につき研鑚し其技益々進み遂に一生面を開く。

本圖は當山三百二十二世を董せる可庭和尚の寄附せるものにて今は國寶なり。

楊柳觀音

（左右仇英の筆山水と共に三幅對）

吳道子筆

吳道玄、字は道子、陽翟の人、幼にして貧、書を學びて成らず、畫に工みにして深く妙處に入り、名天下に震ふ、其筆超妙、人物八面生意の活動あり傳采又巧にして縑素に超出す、描く處の觀音頗る名あり。

本圖は先年鑑査狀を附せられたり。

観音（墨畫）（左右子果の山水と共に三幅對）

牧渓筆

釈法常號を牧渓と云ふ、龍虎猿鶴蘆雁山水人物、筆に随ひて成る意志簡當、些の装飾を費さず、神韻頗る多し、本圖は左右の子果山水圖と共に三幅對にて鑑査狀を附せられたるものなり。

山水

子果筆

子果の傳、今之を詳かにせずと雖も宋代の作として正に超凡なり、牧渓の觀音と共に三幅對（左右子果）にして美術上參考となるべきものとの鑑査狀を有す。

蝦蟇之圖（三幅對の内）（絹本淡彩）

狩野探幽筆

承應三年甲午七月十二日、探幽、安信、相約して當方丈に就きて畵く所、安信の畵は、中觀音、左右猿鶴。探幽のは中達磨左右は即ち此の幅なり、今其の中幅を省く。探幽は孝信の長男にして狩野家中興の祖なり、名は守信、幼名四郎次郎と稱し又釆女と云ふ、剃髪して探幽齋又は白蓮子と云ふ、延寶三年、七十三歳にて沒す。

江山漁舟の圖

三松筆

蔣嵩は三松と號す、金陵の人にて山水人物を得意とし多く焦墨を以て之を描く、其繪は寸山霧を生じ勺水波を起すの慨あり、本圖の如き實に生氣の躍動を見る、國寶なり。

蘆雁之圖

林良筆

林良、字は以善、明人なり、廣東に生れ着色花果翎毛皆精巧を極め、水墨にて禽鳥樹木をも作る、其技遒勁草書に似、觀者をして色を動かさしむるものあり。

本圖は鑑査狀を附せられたるものなり。

睡鷗圖

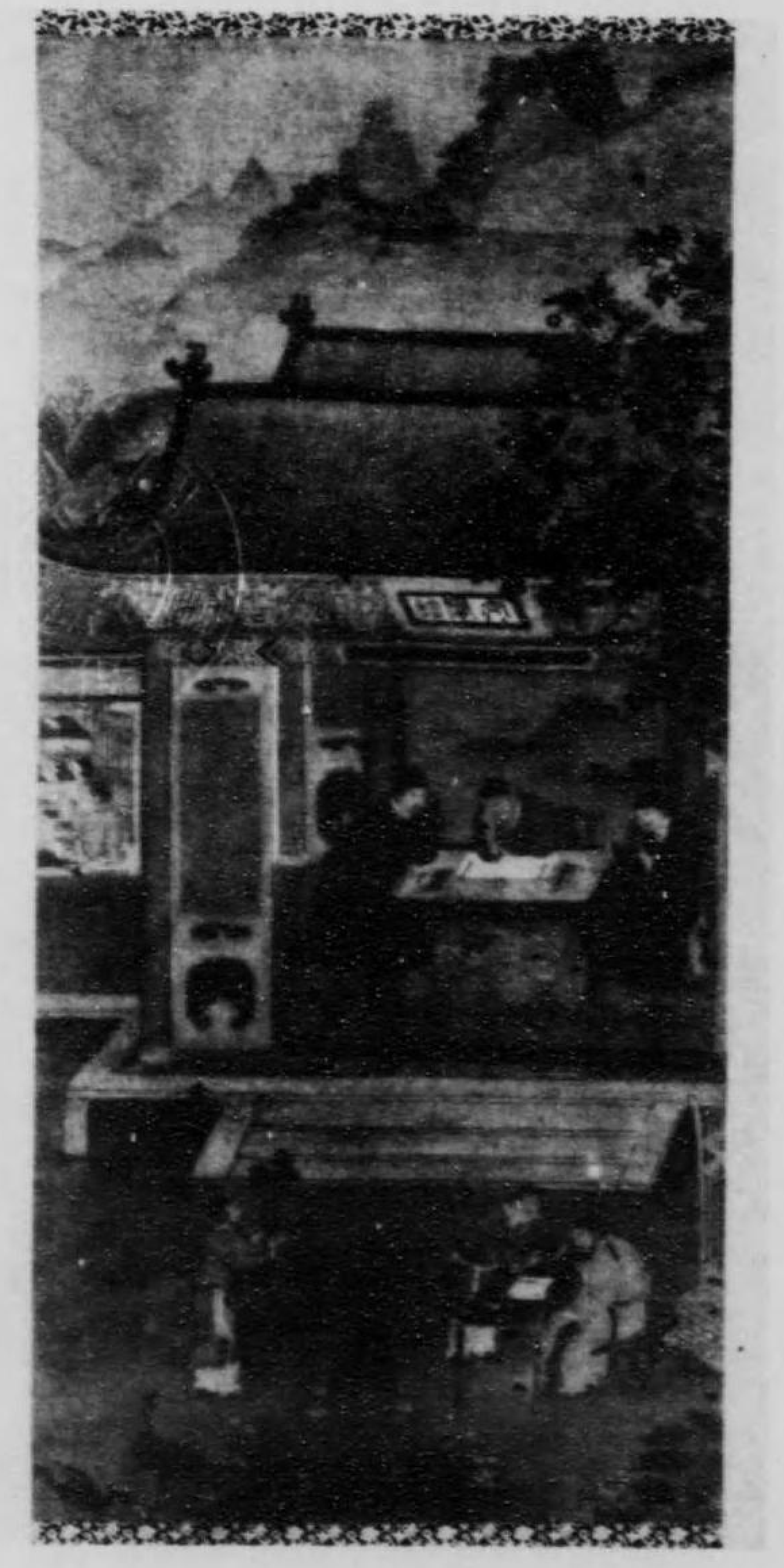
萬國楨筆

明の人、萬國楨、字は伯文、水墨花草を善くす、淡技濃葉、嶺南の派、概ね然り、後豫章に游びて稍々舊習を改め其晩年は渉筆頗る輕妙にて寫竹は其の最も得意とする處なり。

藥山李翺禪會圖

馬公顯筆

馬公顯は宋人なり、馬興祖の子にして花禽人物山水共に善くし自家の傳を得たりと云ふ、本圖は美術上要用なるものにして先年國寶に加へらる。



梅花書屋の圖

李明筆

李明、字は文忠、萊仙と號す、錢塘の人にて山水人物を善くす。

書の圖（琴棋書畫四幅中の一）

孫道筆

孫道は錢塘の人なり、山水樓閣人物等を善くす、本圖は琴棋書畫四幅對中の書之圖にして他の三幅と共に鑑查狀あり。

花鳥圖

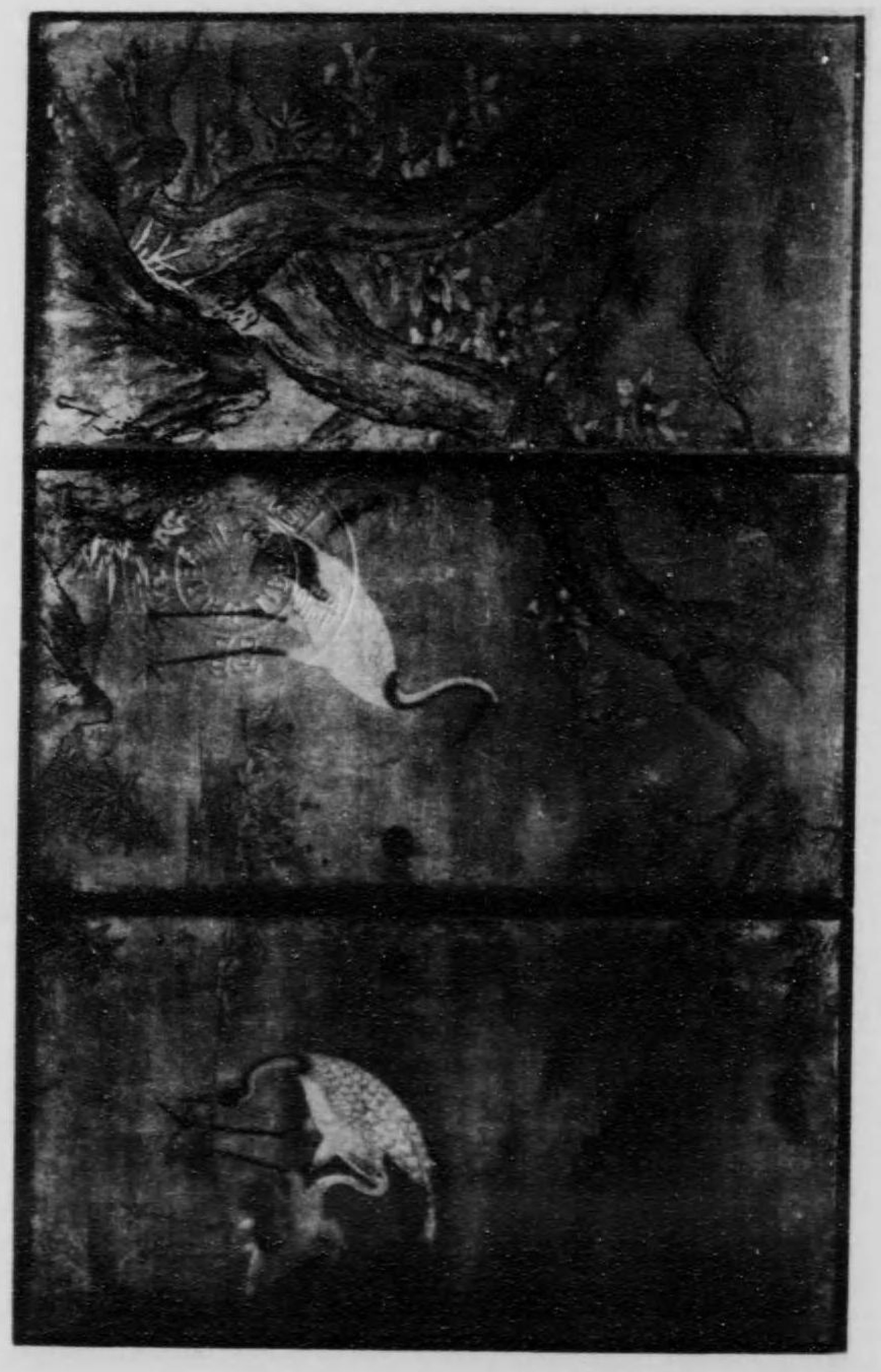
明人　周之冕筆

周之冕、字は服卿、少谷と號す、長洲の人、花鳥を寫意し神韻あり、設色鮮雅動筆生意あり。

三友堂圖

文進筆

戴進、字は文進、靜庵又は玉泉山人と號す、錢塘の人なり、神像、人物走獸、花果、翎毛倶に精緻を極め唐宋の先賢に下らざる名家なり。



鶴の圖（紙本金泥着色襖繪）

狩野元信筆

大方丈七間の內三間の襖及び戸障子の腰張等、大小五十餘枚、皆元信の筆になる。本國は鶴の間の一部にして畫面雅麗を極め氣韻生動す。元信は初めは四郎次郎と稱し後ち大炊助と改め剃髮して、永仙又は玉川と號す、始め業を父正信に學び周文を慕ひ、小栗宗丹を師とす、後年狩野派に土佐派を加味し、新機軸を出せる狩野家の二世にして最初の名匠なり、山水花鳥を善くす。

柳緑花紅の圖

狩野山樂筆

本圖は清涼殿柳の間の一部にして狩野派を完成せし桃山時代の名匠山樂の筆なり、惜しいかな畫面傳釆剝落せり、山樂、名は光賴平三と稱し三樂と號す、秀吉の近侍より擢ばれて永德に業を學び遂に父子の義を結び出藍の譽あり、寛永十二年八月四日京師に沒す、年七十七。

虎之圖（紙本金地著色襖繪）

狩野探幽筆

當山小方丈三間の障壁、並に襖大小五十四枚、中に就き、此圖は世に水呑の虎と稱し、鑑賞家の間に喧傳せらる、探幽の傳は略す。

大正十年三月廿五日印刷
大正十年四月一日發行

不許複製

京都市上京區南禪寺福地町
編輯兼發行人　樂々露山

京都市上京區南禪寺福地町
發行所　南禪寺宗務本所

京都市下京區高倉通四條下ル二一七番戸
印刷人　吉村金松

京都市下京區高倉通四條下ル二一七番戸
印刷所　鳥居西湖堂

11
441

終